

島田正治

ことしの一月一日から始めた「サンアントニオ村とその周辺描く 百点制作」は五月三十一日に完了した。正味五ヶ月かかったことになる。二〇〇五年のカレンダーに制作した日は印、そうでなかった日は×印をつけた。よく見ると、制作は月曜から始まって金曜あたりまで、土曜日・日曜日は休んでいることが多い。一週間に平均して五作、やはり若い頃とちがって、毎日描きに出るには少々無理がある。週末は十分休養して、週のはじめの月曜日からに備える。それでまた元気になった。

紙の大きさは、画仙紙半折の三分の一ときめた。44.5x 33.5cm ほぼ日本の新聞紙一ページの半分ぐらい、そんなに大きくはない。描く対象によって紙を横にしたり縦にしたりした。同じところへ何度も通っている。しかし、その日その日によってみな別の絵になる。同じ絵はめったにない。

この二十年ものあいだに村はもちろんのこと、その周辺もずい分変ってきた。あちこちに新築の家が建つ。しかも二階家でちょっとした別荘のようでもある。日本円にしたら何千万するのではないか。かつて二階建ての家など、この村には数えるほどしかなかった。しかも五十年百年ともいわれる日干しレンガの家がほとんどだった。描くにこのひなびた家並みがよく、二階家など目に入るとむしろ邪魔になって省いて描いたほどだ。

わたしは、毎日村の中を歩くので、あちこちにできる建築中の家々も最初から見ている。一部始終といってよい。ときどきしばし立ち止まって眺める。中にはずい分手抜きと思われるものに出くわす。こういう家は、乾期の頃はよいが、雨期になると水びたしとなり、壁を伝って湿気があがる。家もかつてのようにしっかりしたレンガ作りの家が少なくなった。セメントを固めただけのブロックで、建築費が安上がりとなる。レンガもブロックも、この上から漆喰やペンキを塗ってしまえばわからなくなるのである。

そもそもメキシコの人たちは比較的器用である。村の中でぶらぶらして、何の仕事で生活しているのかなと思われるような人でも、家一軒ぐらいは建てられるから感心してしまう。レンガも自分で焼いて作ったのだという。建築家かと思うと決してそうではない。いわば何でも屋というか、ふつうの素人のひとに過ぎない。職業を転々として、二十以上仕事を変えたそうだからさもありなんと思う。それがまた自慢で誇りでもある。ちょっと日本の事情とは異なる。真のプロといわれる人が少ないのもほんとうである。（つづく）